

## 進化論を社会科学に埋め込む理論としての分断即応モデルの衝動元型論

明治大学 内藤朝雄

社会学を含め社会科学にはさまざまな理論枠構成法がありうる。多くの場合、構成要素の位置には行為者、あるいはその行為、役割、コミュニケーションといった個人水準の事象が設定され、構成された全体の位置にはなんらかの複数個人水準のまとまりとしての社会が設定される。その他にも、個人水準よりも小さな心的メカニズムを構成要素に設定し、構成された全体の位置に複数個人の水準でまとまる社会を設定することもできる。後者の場合、構成要素たる心的メカニズムの位置に、心理系隣接諸領域からさまざまなモデルを転用することができる。

本発表では、この後者の心理-社会理論に心的メカニズムに関する進化論の理論モデルを転用する際に必要となる、究極因水準と至近因水準とを接合する新たな衝動元型に関する理論を提出する。

進化理論の究極因レベルの存在項目は何万年のタイムスパンの次元に存在を措定された理論的構築物である。それに対して社会科学の領域に措定された存在項目は、より短い時間軸上の存在項目である。究極因レベルの心的モジュールを、至近因レベルの心理-社会的現象にそのまま用いることはできない。

それでは、どのようにして究極因が問題となる進化理論の知見を、至近因が問題となる社会科学に転用すればよいのだろうか。

進化理論を用いた以下のような発見法的なプロセスによって、究極因と至近因を接合しつつ、分断即応的な衝動元型モデルを生み出すことが可能である。すなわち、進化的適応環境から推論された究極因レベルの心的モジュールを、「どの文脈でどの対象がどのような意味を有し、そのなかで何を求めるか」といったその進化適応上のオリジナルな脈絡からある程度分断し、行動体制化へ向かう衝動だけは強いままにするとどうなるか、という思考実験によって仮定法的に生み出されるモジュールを、現在の至近因的水準に存在する衝動元型として理念的に措定するのである。

この衝動元型は、一人一人にとってはそのものとしては自覚しがたく、ときどきの（進化的適応環境ではありえないような）社会的な筋書に何らかの仕方で誘導されながら体制化されうる。場合によってはオリジナルな進化的適応環境で生じたと仮定すれば正反対の適応価を有する行動へと体制化することすらあるが、たとえその外形的内容は逆であっても元型形態はオリジナルのままである。しかし、そのさまざまな体制化の確率的な分布としてはオリジナルな進化的適応環境に方向づけられて分布する。

この衝動元型の体制化は、もっぱら個人のまとまりにおいて生じることもあるが、そうでないこともある。たとえば、ひとりひとりの衝動元型の体制化へと向かう作動連鎖が、個人のまとまりを超えて複数個人の社会的水準で、なにかへの共同注意や、自分たちの共同感情活性化輪郭への畏怖感情を随伴した自己触媒的共同注意によって集合的に生じ、個人は事後的にしかそれを意識できないこともある。

以上のように、本発表では、究極因と至近因を接合しつつ進化論を社会科学に埋め込む理論としての、分断即応モデルの衝動元型理論を提出する。